

企業家の日記について

阿 部 武 司

大阪大学名誉教授

I 企業家の伝記

ある企業家について研究する際、自伝を含む伝記類は重要な史料となる。伝記はその人物の生前に出版されることもあれば、没後に刊行されることもある。伝記の編纂方法も様々であろう。自伝は、今日のオーラル・ヒストリーの記録と同じく、企業家自らが談話の速記録に加筆修正を施したものが多くと思われるけれども、記憶だけに頼る語り手もいるだろうし、日記や備忘録に依存しながら語る人もあろう。没後に編纂された伝記には、生前の個人が残した何らかの記録や、公刊されている書籍や雑誌などに基いて書かれたものの他、生前にその人物と親しかった人々からの聴き取り、あるいは彼らに故人を偲ぶ原稿を書いてもらい、それをまとめたものが多くはないだろうか。

このように多彩な編集方法を経て刊行された企業家の伝記類のうち、史料的价值の高さを感じさせるのは、日記や、今回は言及しないけれども書簡などの一次史料を活用している書物である。思いつくままに挙げれば、石川安次郎『孤山の片影』（私家版、1923年。近代的綿紡績企業のパイオニア大阪紡績の技術者で経営者の山辺丈夫の伝記）、矢野文雄『安田善次郎伝』（安田保善社、1925年〔中公文庫版、1979年〕。金融業を中心とした安田財閥の創始者）、喜多貞吉編『和田豊治伝』（和田豊治伝編纂所、1926年。和田は富士瓦斯紡績社長で、「財界世話役」）、奥田

英雄『中原延平伝』（東亜燃料工業株式会社、1981年。同社を創立し社長）などである。いずれも一読すれば、量的質的に優れた情報に満ち溢れた重厚な記述に圧倒される。上記4冊のうち安田善次郎の伝記の序文で、著者の矢野は、「翁（善次郎—引用者。以下同様）には自筆の日記あり、明治五年に始まりて、其の歿する年（1921年）に及ぶ五十余年の永に亘て、公私の動静、概ね記して遺すことなし、唯其の生れてより明治四年まで、三十四年間の事に至ては、更に索聞捜査の必要ありしが、幸に翁に縁故ある耆旧宿老の尚ほ存するありて、其の資料を充たすを得たり」と記している¹⁾。さらに、由井常彦『安田善次郎—果報は練って待て—』（ミネルヴァ書房、2010年）は、同じ安田善次郎日記を改めて使用し、善次郎が、1882年に創立された日本銀行の理事として近代銀行制度を樹立する上で卓越した功績を残したことなど、多くの新事実を解明している。

日記が、企業家の伝記の質を大きく向上させる史料であることは以上より明らかであろう。さらに言えば、日記自体を一種の企業史料として企業家史あるいは経営史の研究に活用することが望ましいと思われる。政治史の分野で政治家の日記は、書簡と並んで最も基礎的な史料であるため、その翻刻と出版が盛んになされてきたことは『原敬日記』『木戸幸一日記』『西園寺公と政局』などの例を挙げれば容易に理解できるだろうが、企業家史に関わる日記の公刊は表

表 1 公刊された主な企業家の日記

順	企業家名	生没年	企業者活動またはその舞台	書 名	対象年次
1	岩崎弥太郎	1835-1885	三菱汽船会社, 長崎造船所	岩崎弥太郎岩崎弥之助伝記編纂会編『岩崎弥太郎日記』(岩崎弥太郎岩崎弥之助伝記編纂会, 1975 年)	1860-73
2	渋沢栄一	1840-1931	約 500 の近代的会社企業や団体の創立	竜門社編『渋沢栄一伝記資料』別巻第 1・2 巻 (竜門社, 1966 年)	1868-1930
3	安川敬一郎	1849-1934	福岡県筑豊地方の大炭坑主。明治鉱業, 安川電機, 九州製鋼等の企業を創立	北九州市立自然史・歴史博物館編『安川敬一郎日記』第 1-4 巻 (第 5 巻は未完) (北九州市立自然史・歴史博物館, 2007-12 年)	1898-1908, 1915-25
4	麻生太吉	1857-1933	福岡県筑豊地方の大炭坑主。鉄道・銀行・電力・築港・セメントなどの企業も経営	麻生太吉日記編纂委員会編『麻生太吉日記』全 5 巻 (九州大学出版会, 2011-16 年)	1906-33
5	高橋義雄	1861-1937	三井銀行, 三井呉服店, 三井鉱山, 王子製紙	高橋義雄『万象録—高橋箒庵日記—』第 1-9 巻 (思文閣出版, 1986-2021 年)	1912-21
6	和田豊治	1861-1924	富士 (瓦斯) 紡績, 富士電力	小風秀雅・阿部武司・大豆生田稔・松村敏編『実業の系譜 和田豊治日記 大正期の財界世話役』(日本経済評論社, 1993 年)	1918, 1921-22
7	平生鈺三郎	1866-1945	東京海上保険, 大正海上火災保険, 川崎造船所	甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会編『平生鈺三郎日記』全 18 巻 (甲南学園, 2010-18 年) (a)	1913-45
8	白岩龍平	1870-1942	湖南汽船創立者の一人。東亜興業経営	中村義『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯—』(研文出版, 1999 年)	1896-1906, 1933-35
9	小林一三	1873-1957	阪急電鉄, 阪急百貨店, 東宝	小林一三『小林一三日記』全 3 巻 (阪急電鉄, 1991 年)	1898, 1900, 1902-04, 1906, 1935-37, 1940, 1945-57
10	榊谷仙次郎	1877-1968	榊谷組	飯吉精一編『榊谷仙次郎日記』(榊谷仙次郎日記刊行会, 1969 年)	1910-46
11	貝原収蔵	1879-1973	東亜煙草。1930 年代天津での日本人経済界の要職を歴任	柳沢遊編『貝原収蔵日記—在華日本実業家の社会史—』(柏書房, 1993 年)	1909, 1912-32
12	朝倉每人	1882-1971	富士瓦斯紡績, 第二富士電力, 日産自動車	阿部武司・大豆生田稔・小風秀雅編『朝倉每人日記』全 6 巻 (山川出版社, 1983-91 年)	1926-46
13	中原延平	1890-1977	東亜燃料工業の創立者で社長	奥田英雄編『中原延平日記』全 5 巻 (石油評論社, 1994 年)	1937-72

(注) 順は生年月日の早いものの順。(a): 三島康雄編『平生鈺三郎日記抄—大正期損害保険経営者の足跡—』上・下巻 (思文閣, 1990 年) は平生日記の抜粋版。

1 にまとめた程度に過ぎない。こうした状況のなかで、私は若い頃から経済人の日記の翻刻に関わってきた。それも一種の企業家研究といえなくもなかろう。以下ではその経験を紹介した

い。

Ⅱ 朝倉每人日記

東京大学大学院経済学研究科の大学院生とし

て経済史・経営史の研究を始めた私は、1980年ごろ、高村直助先生の同大文学研究科での演習を通じて知り合った小風秀雅^{おおまめ うだ}、大豆生田稔^{たかふさ}両氏など同世代の日本史専攻の方々と、経済人の日記の翻刻・出版に関わるようになった。お話をもってきて下さったのは、経済学研究科の恩師中村隆英先生である²⁾。当時、山川出版社が、二・二六事件で有名な軍人の真崎甚三郎や本庄繁の日記など近代史関連の新史料を、「近代日本史料選書」の名の下に続々と出版していた。このプロジェクトを推進していたのは高村先生と同じく東京大学文学部国史学科教授の伊藤隆先生であった。伊藤先生は、多数の門下生とともに、日記・書簡類を中心とした一次史料を旺盛に発掘・翻刻・公刊し、それらを駆使して昭和政治史の研究水準を飛躍的に高めていたが、中村先生とは以前から親しく交流されていた。中村先生は、成蹊大学学長の朝倉孝吉先生とも親しく、同先生の御尊父朝倉每人^{つねと}（1882-1971年。以下、朝倉）の日記の存在を確認され、その情報を伊藤先生と共有されたことによって、阿部・大豆生田・小風編『朝倉每人日記』全6巻（『近代日本史料選書』9・1-6）の刊行が実現したと私はみている。

朝倉の知名度はあまり高くはないが、大分県出身で1907（明治40）年に京都帝国大学法科大学を卒業後、同郷の和田豊治が経営する大企業・富士瓦斯紡績に入社し、同社に甚大な損害を与えた関東大震災を経た1925（大正14）年に常務取締役役に就任した。その後、朝倉は社内の人事抗争に敗れ、子会社の第二富士電力株式会社に出されて電力業界に入ったが、1936（昭和11）年に同郷の民政党代議士松田源治の死去に伴い、補欠選挙への出馬を依頼され当選し、同党所属衆議院議員を約1年間務めた。その間、自動車製造事業法推進のため京都大学の恩師小川郷太郎^{あいかわよしすけ}商工大臣とともに日産自動車の工場を視察したことから同社社長鮎川義介の知遇を得て、彼の懇請を受けて日産自動車に入社し、戦時期には自動車統制で活躍した。昭和前期に綿

紡績、電力、自動車という当時の基幹産業の経営を担い、戦時期には複雑な自動車統制を進めた人物である。大分県や京都大学に関わる政財界の人脈も興味深い。

和紙に墨書された朝倉の日記は、富士瓦斯紡の経営者に就任した直後の1926年に始まり、敗戦後も書き続けられるが、私たちの翻刻は1946年12月末までの原典全37冊に限ることとし、最終巻には1946年の日記のほか未公刊の「自伝草稿」と「関係書簡」を収録した。

全6巻の出版年は、第1巻が1983年、最終巻が91年であったから、完成までには10年近くの歳月を要し、その間に私は東京大学社会科学研究所助手から筑波大学社会科学系講師を経て大阪大学助教授になっていた。翻刻には先にお名前をあげたお2人のほか東京大学在籍中の学部生・大学院生多数に協力してもらい、編集責任者3名が不慣れなところは山川出版社の編集者塙ひろ子、鵜崎信夫^{ときざき}の両氏が補って下さって、ようやく全巻を世に送り出せた。

日記の内容は著者によって千差万別であるが、朝倉日記は、経済界のことだけを書いてある訳ではなく、日々の生活を淡々と記している記事が大部分を占め、辛抱強く注意深く行間を読み進めることによって初めて様々な史実を把握できる。翻刻を分担していた口の悪い仲間が、刊行されたこの日記を「無内容で、紙資源の無駄使いだ」と批判していたのを思い出す。確かに一読して面白い史料とは言いがたい。しかし、この朝倉日記が出版後、十数年を経て井口治夫『鮎川義介と経済的国際主義』（名古屋大学出版会、2012年、第1・2・4章）、宇田川勝『日本の自動車産業経営史』（文真堂、2013年、第3章）、四宮正親『自動車流通の経営史—メーカーとディーラーの関係を中心に—』（日本経済評論社、2020年、第5章）などの優れた研究書で、戦時期の自動車統制等に関して活用されているのを見て、私たちの努力もけっして無駄ではなかったと知った。

Ⅲ 和田豊治日記

朝倉日記と深く関連するもう一人の経済人の日記翻刻の成果が小風秀雅・阿部武司・大豆生田稔・松村敏編『実業の系譜 和田豊治日記 大正期の財界世話役』（日本経済評論社、1993年）である。和田豊治（1861-1924年）は、大分県出身で慶應義塾、アメリカ留学、三井銀行入行までは、後日著名な経営者となる武藤山治と切磋琢磨する親友であったが、三井銀行から彼と同じく鐘淵紡績に派遣された和田がその東京の本店、武藤が新設の神戸支店を経営する中で、武藤との競争に敗れた。1901年に三井を去った和田は東京日本橋の間屋が設立した富士紡績に迎えられ、専務取締役として経営不振にあえぐ同社の再建に成功した。1906年に富士紡績は東京瓦斯紡績を合併して富士瓦斯紡績となり、1916年に和田は同社社長に就任した。そのころより和田は、多数の企業が抱える様々な問題を次々に解決し、渋沢栄一の後世代の「財界世話役」として名声を高めていった。1923年に発生した関東大震災は関東地方を基盤としていた富士瓦斯紡績に甚大な被害をもたらし、和田はその復興指揮のため過労に陥り、翌年急逝した。

和田豊治が第一次大戦（1914-18年）前後に詳細な日記を残していたことは、彼の財界世話役活動を活写した前掲、喜多編『和田豊治伝』で確認されるが、豊治の孫にあたる和田修一氏が日記の原本を所蔵されていることは朝倉孝吉先生より早くからうかがっていた。朝倉日記の翻刻が一段落着いたのち、朝倉先生のご紹介でお目にかかった和田氏は、私たちのお願いを好意的に受け入れて下さり、和紙に墨書された原史料の貸与と複写はすぐに実現した。大部であった朝倉日記とは異なり、原典は和綴の冊子6点にすぎず、解読も比較的容易であったため、翻刻は小風・阿部・大豆生田・松村の4名で進めることにした。出版は日本経済評論社が引き受けて下さり、編集担当の谷口延京氏にお世話

いただいた。なお和田修一氏は本書の出版費用の一部も、同氏が主催する和田薫幸会を通じて支援して下さい。

和田日記は1918（大正7）年10月～12月、1921（同10）年1月～22年2月、および1922年4月、と第一次大戦中・後の不連続な時期をカバーしている。その間には1919年春以降約1年間続いた戦後好況、1920年3月に始まる大恐慌という二つの重大なトピックがあるが、残された日記からは、残念ながらこれらの時期に関する直接の情報は得られない。前記の喜多編『和田豊治伝』には上記の日記が頻繁に引用され、現在は見当たらない1918年7～9月、および1921年2月25日以降1か月余りの記事も引かれている。それら紛失分も含め、未発見の和田日記が今後再び出現することを期待したい。

和田日記は、朝倉日記とは異なって、ほとんどの記事が、和田が心血を注いでいた経済界の生々しい実態とそれへの彼の見解および対応を記録しており、「財界世話役」とは何であったのかを如実に示す貴重な史料である。この日記は、松浦正孝『財界の政治経済史―井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代―』（東京大学出版会、2002年、第2章第2節）でも参照されているが、ユニークで興味深いのは石井寛治『情報・通信の社会史―近代日本の情報化と市場化―』（有斐閣、1994年、181-84頁）が、1920年前後に多忙を極めていた経済界トップによる個人電話のビジネスへの活用例として和田日記を用いていることである。

Ⅳ 企業家の日記翻刻の再開―大原總一郎日記と稲盛和夫直筆手帳（業務日誌）

この和田日記の刊行以後20年間余り、私と経済人の日記の関わりは途絶えていたが、ここ10年間のうちに復活した。まず2015年に、大阪大学でお世話になった猪木武徳、宮本又郎両先生のご推薦により、岡山県倉敷地方の素封家大原家の事業を顕彰し文化・社会に貢献する団体・有隣会が企画する大原總一郎日記の翻刻の

外部責任者となった。大原總一郎（1909-68年）は倉敷紡績等の経営で著名な大原孫三郎³⁾の長男で、戦時期から倉敷絹織（1949年に倉敷レイヨンと社名変更。現・クラレ）の社長を務め、国産合成繊維ビニロンの事業化や世界初の人工皮革クラリーノの開発などで知られた経営者であるが、彼が1947年以降68年に逝去するまでの20年間に大学ノート約100冊にペンで横書きに記し続けた日記を翻刻することになり、阿部が関西で交流していた経営史家数名の協力を得て、目下のところ、年4回の研究会（うち1回は大原日記を用いた研究報告会）を通じて作業を進めている。有隣会からは古文書解読に造詣が深い学芸員の水島博氏が研究会の事務方を担当して下さり、私たちが文字起こしをした素原稿を毎回丁寧に点検してくれている。完成原稿は順次、稿本に取りまとめられ、これまでに6冊が作成されたが、研究会発足後10年目で日記全体の約4分の1弱をようやく終えつつあるところである。翻刻された大原日記の閲覧・使用は現在、研究会メンバー間に限定されているが、今後、論文等の形で大原日記のエッセンスが公表されていくことが期待される。

ところで、京セラ株式会社の稲盛ライブラリーが宮本又郎先生に会長就任を依頼して、2020年に稲盛和夫研究会が発足したが、2023年4月に私もその一員に加えていただいた。同研究会について詳しくはそのホームページを参照されたいが、稲盛ライブラリーが収集してきた史料を活用して研究会メンバーが、稲盛和夫（1932-2022年）と彼が育てた世界的企業・京セラに関する人文・社会科学的研究を進め、年4回の研究会（うち1回は公開シンポジウム）でその成果を報告し、年刊の紀要『稲盛和夫研究』にその成果を論文等の形で公表している。

稲盛ライブラリーにも稲盛和夫が遺した1959年から1969年初頭までの「直筆手帳」（業務日誌）が所蔵されている。翻刻などに私は関わっていないけれども、これまで私が読んできた日記類の中では、整然としたペン書きの稲盛

の筆跡は判読が最も容易なものである。その利用は今のところ研究会メンバーのみに認められているが、メンバーの1人の論文、沢井実「創業直後期京都セラミックの営業実態」（『稲盛和夫研究』第3号、2024年、1-14頁）は1959-1960年の「稲盛和夫直筆手帳」を駆使し、その価値を遺憾なく発揮している。稲盛と同じく技術者出身の経営者の日記には、すでに触れた山辺丈夫のそれがあり、東洋紡株式会社に原典が保管されているが、前掲の伝記『孤山の片影』に収録されたその一部からでも、技術への強い関心と無駄のない簡潔な記述という稲盛の備忘録との共通性を読み取ることができて興味深い。

私は、すでに述べたように、これまでに4人の経営者の直筆の日記を読む機会を持ったが、それらの解読は概して容易ではなかった。近現代に作成された肉筆の文書は、近世文書を読めるからすらすらと判読できるというようなものではない。書いた人によって筆跡は様々であり、悪筆も少なくない。そうであるからこそ、重要な経営者の日記が活字で読めることはありがたい。また公刊された日記には多くの場合、適切な解題が付けられており、史料の理解に有益である。日記から何を読み取るのかもなかなか難しい。研究者が期待するコンテンツがストレートに書かれていることはほとんどないだろう。対象となる経営者に関する必要な情報を意識的に蓄積した結果、何らかの仮説が得られた時に初めて、日記の行間から重要な史実が読み取れることが多いのではなかろうか。

注

- 1) 矢野『安田善次郎伝』序文。
- 2) マクロ経済史や在来産業論で有名な中村隆英先生は、あまり知られていないが、経営史にも造詣が深く、一例を挙げれば中村隆英『日本経済の建設者—あの時この人—』（日本経済新聞社、1973年）を上梓している。
- 3) 私は孫三郎の伝記、阿部武司編『大原孫三郎—地域創生を果たした社会事業家の魁—』（PHP研究所、2017年）を上梓した。

